



『バスケット☆ボール』

●私がこの世で一番好きなスポーツはバスケットボールである。

●バスケットボールとは実に簡単なもので、直径二十四・五センチメートルのさほど大きくない球体を三〇五センチメートルの高さにある幅四十五センチメートルのリングにより多く入れた方が勝者となる。ただ、それだけのこと。

●だが……そこには緻密な戦略家たちの様々な思惑が存在する。世界最高の男たち……身長二メートルで百メートルを十秒台で縦横無尽にコート走り回る男を消し去るには？距離にして約十メートル離れたところの三ポイントラインからシュートを放つ魔法使いから魔法を奪う方法はあるのか？マクドナルドのビックマックを五十個食べる二メートル十六センチメートルの大男が守るゴール下の鉄壁のディフェンスを崩すには？単純明快な図式の中、時に臆病に、時に大胆に、時に斬新に繰り広げられる極上の戦い……これがバスケットボールだ。

●私がバスケットボールに出会ったのは小学四年生。わけもわからずにコート上にあがり、いきなり小学六年生が先輩からひじ打ちを食らい、顎を二針縫ったのがデビュー戦。完全なる敗北。そんな大嫌いなバスケットボールを続けるきっかけは、私が純粋な向上心や負けず嫌いな性格であった……わけではなく、不純なことに好きな女の子が言った一言。「バスケットボールをやっている男の子って、素敵！」。男って、単純かつ馬鹿な生き物である。



●しかし、この一言が私の世界を変えた。その子に感謝しなければならぬのは、バスケットボールというスポーツの向こう側に壮大な世界が広がっていたこと。

●大学の入学式を控えた三月、父の仕事の付き添いで生まれて初めてアメリカの大地を踏んだ。ニューヨーク・ニックスの本拠地であり、バスケットボールの聖地マジソン・スクエアガーデン。アメリカのプロバスケットボールNBAの伝説的プレイヤー・マイケル・ジョーダンに「ここはバスケットボールをするべき者にとっては特別な舞台だ。」と言わしめた場所。そんな彼を生まれて初めて見た場所。スーパースターと言われる人物であっても、ただ黙々とチームメイトとパスを繰り返して、繰り返し練習していた。何回も何回も何回も何回も……。

●昨年、NBA二〇一四・二〇一五シーズンの優勝を果たしたサンアントニオ・スパーズというチームがある。際立って目立ったプレイヤーがいるわけではないが、十八年連続でプレイオフに出場しているチームである。NBAはトレードも頻繁に行われ、優勝を狙える位置に居続けるのは難しい世界である。その中で十八年連続その位置にいることは「すごい。」という以外に言葉がない。

●このバスケットボールの世界に在るのは、チームプレイの意味と大切さ、先輩や後輩への敬意とコート上の仲間への感謝、基本というものの重要性、勝つことの難しさというものの悔しさ。おそらくこうした感触を個人のスポーツでは味わうことはないだろう。

●「何が良かったのか……？」スポーツや趣味、音楽、芸術、勉強はとことんやってみないと物事の本質は見えてこないし、わからないということ。チョコレートや表紙だけ見ても、美味しいのか、甘いのか、苦いのか、がわからないように……勉強もとことんやってみないと面白いのかどうかはわからない。皆さんが是非とも勉強にとことん向かい合ってくれたいことを私は信じている。

●バスケットボールとは実に簡単なもので、直径

二十四・五センチメートルのさほど大きくない球体を三〇五センチメートルの高さにある幅四十五センチメートルのリングにより多く入れた方が勝者となる。ただ、それだけのこと。だが……。バスケットボールだけでもこれだけの世界が広がっているのだから、あらゆるものに深く壮大な世界が広がっているに違いない。

●我々が生きているこの世界は想像以上に面白い。(松尾)

戦後七十年雑感

●今年の中学三年生の勉強合宿の帰路、私の乗ったバスの車内では、太平洋戦争を描いた映画「永遠の0」を上映しました。合宿では、早朝六時から夜十一時まで連日学習していましたが、疲れて眠いはずの生徒たちだったので、身を乗り出して食い入るように作品を観ていたのが大変印象的でした。



●太平洋戦争が終わってから、今年七十年目の節目にあたります。それだけに、考える機会が多くなったように思います。

●一九四一年に日本の先制攻撃によって始まった太平洋戦争は、最初の半年ほどは攻勢だったものの、次第に敗退が続き、日本本土への空襲、沖縄戦、二度にわたる原爆投下、そしてソ連が日本との中立条約を破って参戦するに至り、一九四五年八月、日本が無条件降伏をすることで終結しました。

●その一方で、当時、あくまで、日本本土に上陸した米軍と最終決戦を行うことを主張した陸軍の勢力がいました。彼らは、皇居を占拠し、天皇が録音した終戦の言葉を放送させないことで、戦争を継続しようと計画しました。しかし、それは失敗し、歴史は現在の日本へとつながります。

●この史実を元に「日本の一番長い日」という本

が書かれ、現在、その映画も公開されています。軍人も政治家も日本の将来を真剣に考えていたことは伝わってきました。戦火に苦しむ国民の考えとはずいぶん異なる尺度ではありましたが……。

●二〇〇八年に放送された「あの戦争はなんだっ

たのか」というテレビドラマでは、一九四一年に政府が開戦を決定するまでの過程が描かれました(東条英機首相を演じたのはなんとビートたけし!)。それを観ると、日本には、国力の差を冷静に考察し交渉によってアメリカとの対立を解決しようとする人々も多くいたのに、軍部の主戦派に押し切られたことがわかります。そもそも、内閣の一員である陸軍大臣または海軍大臣のどちらかが辞めると、総理大臣も辞めなければならないという仕組みだったので、軍部には強いことが言えなくなるのは当然と言えます。

●知らないことは、本当にたくさんある、と思います。その点で、文藝春秋社「知性で戦え・昭和史大論争」という本は大変参考になりました。なぜあんなときそういう選択をしたのか、というさまざまな疑問について、分析がなされています。他にも、大学の入試問題を利用して戦争を考察する企画は面白かったですし、三十代の気鋭の学者だけで行われた座談会は全く意見が噛み合わずに終わり、思わず苦笑してしまいました。

●「六十〜七十年」というのは注意が必要なサイクルだ」という話があります。戦争などの大変に困難な状況を切り抜けるために、物事を大局的に見ることに慣れた人々に代わって、比較的、安定した状況しか経験していない世代が指導者層となるので、机上の論によって戦争をはじめやすいそうです。日本で言うと、敗戦からの復興に苦心していた時期から現在までが正にそうです。明治維

新から満州事変の期間もそのサイクルです。現在の中国も建国から数えて六十七年になります。「歴史は繰り返す、歴史に学べ」という言葉が、強く思い出されます。

●先日、安保法案に反対する大変な人数のデモが話題となりました。ある政治家は「デモは一つの手法だが、それで政治が決められてはならない」と発言しました。わかりにくい政治は問題ですが、わかりやすい政治も、また問題なのです。我々、有権者は、複雑な言葉より、単純な言葉や主張の方を支持しやすいからです。例えば、悪名高いナチスは、有権者の支持により、選挙で多数の議員を当選させて最大の政党となり、民主主義の手順を踏んで政権をとりました。

●現在、中学三年生は、公民の授業で、おこなわれている政治が、自分の考えと異なると感じた場合に、国民にはどのような権利の行使が日本国憲法で保障されているかを学んでいます。まさに、「実学」であり「使える教養」でもあるのですが、残念ながらかれらは有権者ではないため、ただの受験のための知識にとどまがちです。

●現在のところ、日本は七十年間も実戦に参加していない大変幸福で稀有な国です。それは、戦争の悲惨さが今でも継承されているからでしょう。しかし、いずれは、国民全員が戦争を直接経験していない国となります。そのときのために、歴史や公民に学ぶことの大切さを再認識しているところです。



人生の壁

●皆さんは、自分の前に立ちわだかる壁や課題に直面したときどうしますか。壁に向かってチャレンジをしますか。それとも壁を避けて通りますか。

川にたとえると、課題や壁に立ち向かうのは上流に行くこと、さぼってしまうのは下流に流されることです。当然課題や壁に立ち向かうには相当なエネルギーを必要とします。そして、それらを避けるのはとても簡単なことです。そして私たちは、どうしても楽な方に流されていってしまっています。

●「人生は一冊の問題集」という言葉を知っていますか。これは、鎌倉時代の僧侶、日蓮の言葉です。その「問題集」は自分だけのものであつて人に解いてもらうことはできません。しかし、そこには必ずその人が解ける問題しか載っていないのです。そして、私たちはその問題(課題、壁)を解決することによって成長していきます。

●皆さんの中には「今苦しいなあ……」と感じるときがあるかもしれません。特に大きな壁に立ち向かっている受験生は、「逃げたいなあ」「避けて通れないかなあ」と感じていませんか(私は大学受験のときに感じました)。しかし、それは皆さんにとって成長するために与えられた、必要な問題(課題、壁)なのです。そしてその問題は必ず解くことができます。そう考えると、逃げたくなくなる問題に直面したときや苦しいときも、乗り越えられるような気がしてきませんか。

●でも勉強をする際に、問題集だけでは足りませんよね。正解に至るには、授業を受けたり参考書を読んだりする必要があります。では、「人生の問題集」と解くときの参考書は何でしょうか。それは、偉人や、もっと身近な存在でいえば、皆さんの親であったり、教師であったり、先輩であったり……。そのような周囲にいる人たちがみなさんの人生の「参考書」なのです。そのように考えると、周囲の方々の言うことを素直に聞き入れることもできますよね。

●私自身はというと、高校時代は一時間目の体育は当然欠席、授業もさぼる。授業中寝ていたら掃除が始まっていたときもありました。徹底して楽な方へと進んでいました。そして、いまだに、壁

に直面したときは「寝てる間に解決してないかなあ」と考えてしまうことがあります。そして、目が覚めるとやはり解決しているわけもなく、渋々壁をよじ登る……というこもしばしばあります。ですから、皆さんの「参考書」になるためにはまだまだ力不足かもしれません。「人生の問題集」はいつかは解き終わるものではなく、生きていく限り解き続けるものです。皆さんも私も、周囲の方々の力を借りながら、逃げることなく壁に立ち向かっていきましょう。

宿題の大切さ

●みなさんは、宿題って何のためにあるのか考えてみたことはありませんか? 当たり前のようでいて、宿題をすることの本当の意味を考えてみるのは大事なことだと思ふのです。

●先日私が読んだ本の中に興味深い話がありました。中国の武術の達人である二人の人は共通して「日本人は教えられに來たが」と言っているそうです。

●一方、中国の人は、先生と一緒に過ごす時間を「自分が一人で練習をするためのヒントをもらう時間」と考えているそうです。つまり、日本人は教室に「いる」時間だけを練習だと思つているということです。



●予備校に通っていた頃、私を教えていた先生は全国的にも有名な先生で、授業はともわかりやすかったです。しかし、成績が上がったか? という残念ながらあまり伸びませんでした。当時の私は、成績が上がるのには時間がかかるから仕方ない、と自分を説得して、何故成績が上がらないかについて追究をしませんでした。

●そんなとき、その先生が復習をしない奴は、俺の授業を聞いていないのと同じ。意味がないから受けるのをやめた方がいい。」と話されました。それを聞いて初めて私は自分の勉強に対する考え方が間違っていることに気がつきました。人から聞いて、よくわかった! これで大丈夫! 勉強おしまい! で伸びるはずがなかったのです。それ以来私は勉強の取り組み方を変えました。授業を聞いて自分の忘れていた考え方はすぐに調べて、ノートに書き留めました。また、わからなかった問題はコピーしたものをノートに貼り付け、いつでも解き直すことができるようにしました。この作業を繰り返すことによって、すぐにではないですが、成績はだいたい上がりました。

●さて、ノートを作る例に関しては、あくまで私がそうした、というだけのことで必ず作りなさいと言いたいわけではありません。ただ、自分で学習することの大切さを知って欲しいのです。【授業を聞いてその問題を「理解」できること】と【その問題を自分で「解ける」こと】、二つのことは似て非なるものです。それを橋渡しするのが宿題だと私は思います。

●「宿題をしなければいけない」と考えると億劫かもしれませんが、「宿題をすること」で自分の実力が大きく伸びていくのだ」と考えると宿題に対するやる気が出てきませんか? (服部)

▼▲継続希望の方へ▲▼
▶退塾や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送りいたします。
▶在籍していた教室までご連絡ください。